西大寺旧境内の調査
―第498次

1　はじめに

集会場の建て替えにともなう発掘調査である。古老からの聞き取りによると、この地は近世より寺子屋がおかれ、その後、西大寺町の集会場として利用されてきたらしい。西大寺西塔の八角形基壇掘込地業の西端がかかる場所に位置し、現在の西大寺境内からはずれるが、史跡指定地内にあたる。調査に先立って現存の集会場および門柱、塀の撤去を立会のもとおこない、2012年７月24日から本格的な発掘調査に入り、８月17日に調査を終えた。調査面積は東西４m、南北29mであったが、調査の過程で南半部分を東西3m、南北11mにわたって拡張したため、最終的な調査面積は109㎡となった。

2　これまでの調査成果

西大寺の両塔については、昭和30年に大岡実・浅野清両氏によって発掘調査がおこなわれ（大岡実・浅野清「西大寺東西両塔」『日本建築学会論文報告集』54、1956）、四角形の基壇の外側におよぶ八角形の掘込地業を検出した。『日本霊異記』には藤原永手が八角七重の塔を造る計画を四角五重に変更したために地獄に落ちたという説話があり、発掘調査はその記述を裏付けると評価された。

その後、奈良文化財研究所がおこなった防災工事にともなう発掘調査（第208次調査）においても、西塔八角形基壇の北辺東端の一角を確認するとともに、大岡実博士らがおこなった調査区の一部を再発掘して座標を確認している。しかし、北辺部分にあたる第118-36次調査では奈良時代の掘立柱建物を検出しているものの、明確な掘込地業のラインを検出していない。

これらの成果から、推定される八角形基壇の推定ラインは、本調査区の東端にかかる可能性が高いと思われた。図228の赤線で示した部分が掘込地業の推定線である（小野健吉「条坊遺構及び東西両塔・四王堂の配置」『西大寺防災施設工事・発掘調査報告書』、1990）。

3　基本層序

基本層序は地山に似た明黄色の粘質土が10～15㎝堆積

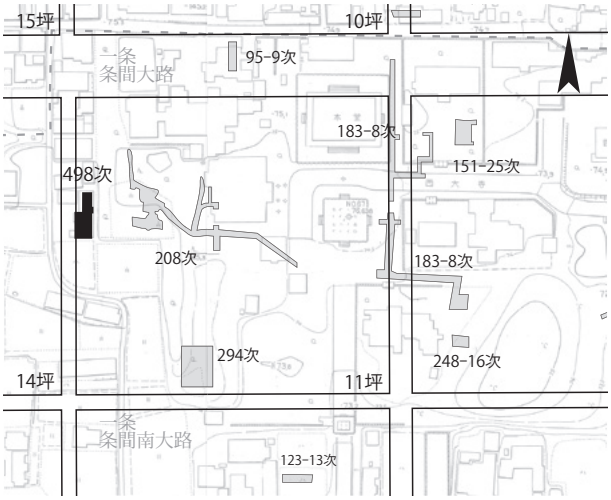

図225　第498次調査区位置図　1：2000

し、その下に近代の遺物を含む暗褐色と貝ボタン製作の残滓が厚く堆積していた。貝ボタン層の下には薄く灰褐色の耕土を検出し、耕土を取り除くと明黄色のきわめて精良な粘質土である地山を検出した。地山検出標高は74.40m付近、現地表面下50～60㎝であった。

貝ボタンは明治時代～大正時代に地場産業として奈良県内各地で生産されており、その残滓である貝は湿気を防ぐ効果があると考えられ、建物建設時に故意に入れられたこともあるという（山﨑健の教示による）。ここでも建物の基礎にあたる中央部分にとくに貝ボタンの残滓が厚く堆積することから（図228の濃いアミ部分）、地盤改良として敷かれた可能性がある。

4　遺　　構

奈良時代の遺構としては、調査区西側に上述の西塔掘込地業、東側に南北方向の条坊側溝を事前に想定したが、いずれも想定位置に該当する遺構は検出できなかった。

土坑SK1050　調査区南側に地山面を掘り込み、浅い土坑と深い土坑が重複する大規模な土坑を検出した。東西両壁の断面観察から、30㎝程度の浅く掘りくぼめた部分を一度埋めた後、さらに深い土坑を掘り、すぐに埋める工程を繰り返したことがわかる。埋土は地山に似た明黄色粘土のブロックと砂を含む灰色の砂質土で、遺物をほとんど含まない。位置は西塔の西側にあたる部分で、西塔に関連した地業の可能性も否定できないが、掘込地業にしては各層が厚く、粗雑な印象が否めない。また、掘込地業の推定線から西へ大きく張り出すことになる。遺物は最上層から三彩の垂木先瓦片が３点出土したにとどまる。

土坑SK1051　調査区西南隅に検出した土坑。SK1050

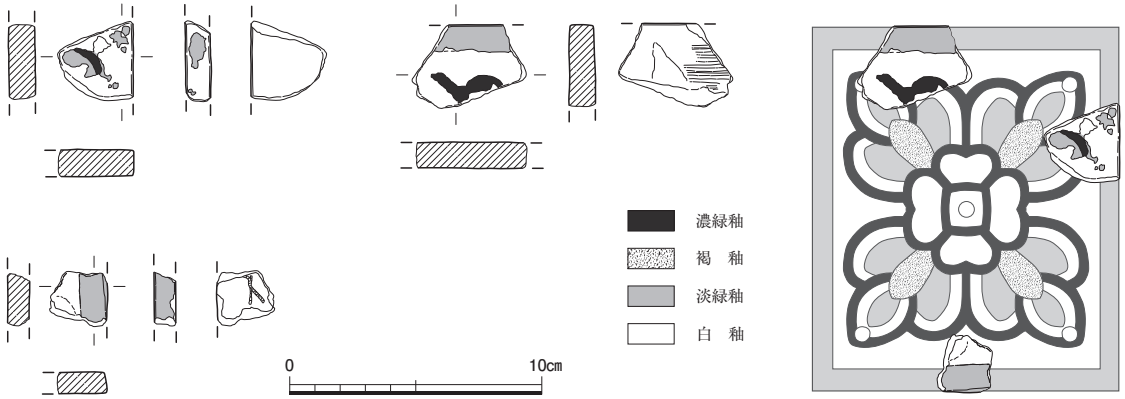

図226　SK1050最上層出土三彩垂木先瓦　1：3

同様、浅い土坑と深い土坑が組み合わさる。埋土もSK1050に似て、砂と粘土を含む。遺物は含まない。

掘立柱塀SA1052　SK1050を挟むように北と南に検出した柱穴。ただし、断割調査の結果、深さ20cm程度で、柱穴との確証は得られなかった。SK1050に先行する柱穴で、間に１基が壊されている可能性も考えられたが、心心間で８ｍあることから、仮に３基であっても柱間が４ｍということになる。　**（神野　恵）**

５　遺　　物

出土した遺物は、近世の陶磁器類と瓦、貝ボタンの製作残滓である。

瓦　　類

第498次調査で出土した瓦磚類を表39に示した。6236Ａは西大寺創建期の瓦である。西大寺の東西両塔や四王堂周辺、食堂院からまとまって出土しており、西隆寺からの出土も知られる。

他にも三彩の垂木先瓦が３点出土した（図226）。いずれも端部が直線をなす方形のもので、飛檐垂木用とみられる。釉の残りはあまりよくないが、端部から約1.0cmと小口側を淡緑釉で縁取りし、内側に濃緑釉で花弁もしくは葉文を表現する。裏面には施釉はみられない。これまでの西大寺東塔・西塔付近の調査で集中的に出土しているものと同様に、濃緑釉の線描により四葉花文を芯として対角線方向に三葉文をあらわす文様構成とみられる。ただし、３については全体的にうっすらと施釉の痕跡が残るが、端部の縁取りや文様の構成が判然としない。本来は淡緑釉と白釉で区分されているはずであるが、現状では確定できない。いずれも厚さ1.0cmで、非常に精良な淡黄褐色の胎土からなる。調整は不明な部分が多いが、２では裏面にハケメがみられ、他の部分はナデられている。３の裏面には撚紐の圧痕が残る。

（川畑　純）

表39　第498次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦			軒平瓦			その他	
型式	種	点数	型式	種	点数	種類	点数
6236	A	1	型式不明（奈良）		3	丸瓦（水切り）	1
	?	1				平瓦（刻印）	1
巴（近世前半）		1				平瓦（朱彩）	1
巴（近世）		1				平瓦（一枚造り）	1
型式不明（奈良）		5				三彩垂木先瓦	3
						熨斗瓦（奈良）	1
						熨斗瓦（近世後半）	3
						熨斗瓦（ヘラ切り）	3
						伏間瓦	4
						道具瓦	4
						土管	3
	計	9		計	3	計	25

	丸瓦	平瓦	磚
重量	11.321kg	72.948kg	0.281kg
点数	113	1728	1

６　ま と め

本調査だけでは、これら遺構に対して明確な解釈を提示することはできないが、今後の課題を提示する意味でも、いくつかの可能性を検討しておきたい。

①西大寺西塔に関連する掘込地業の可能性　SK1050の位置が西塔の真西に位置することや、少なくとも北西辺にあたる部分では、既存の調査から得られた八角形の想定ラインにおおむね合うように土坑が掘られていること、古代の地業に砂を用いて地盤を締め固める工法の存在が想定できることなどを勘案すると、西塔に関連する何らかの地業であった可能性は否定できない。

しかし、疑問点も多い。こういった構造の複数の穴が重複する痕跡が、塔の西側の張り出し部にとどまらず、調査区南西隅（SX1053）にも確認できた点や、今次の遺構検出面が第208次よりも10～20cm程度高いにも関わらず、塔北東部で検出されたような人頭大の石を敷き込む様子や、明確な版築の痕跡は検出できなかった。これらが一連の塔の掘込地業だとすると、東西で大きく様相が異なることになる。この点について検証しようとするならば、塔全体を解明するための学術的な発掘調査が必要

図227　SK1050東半（北から）

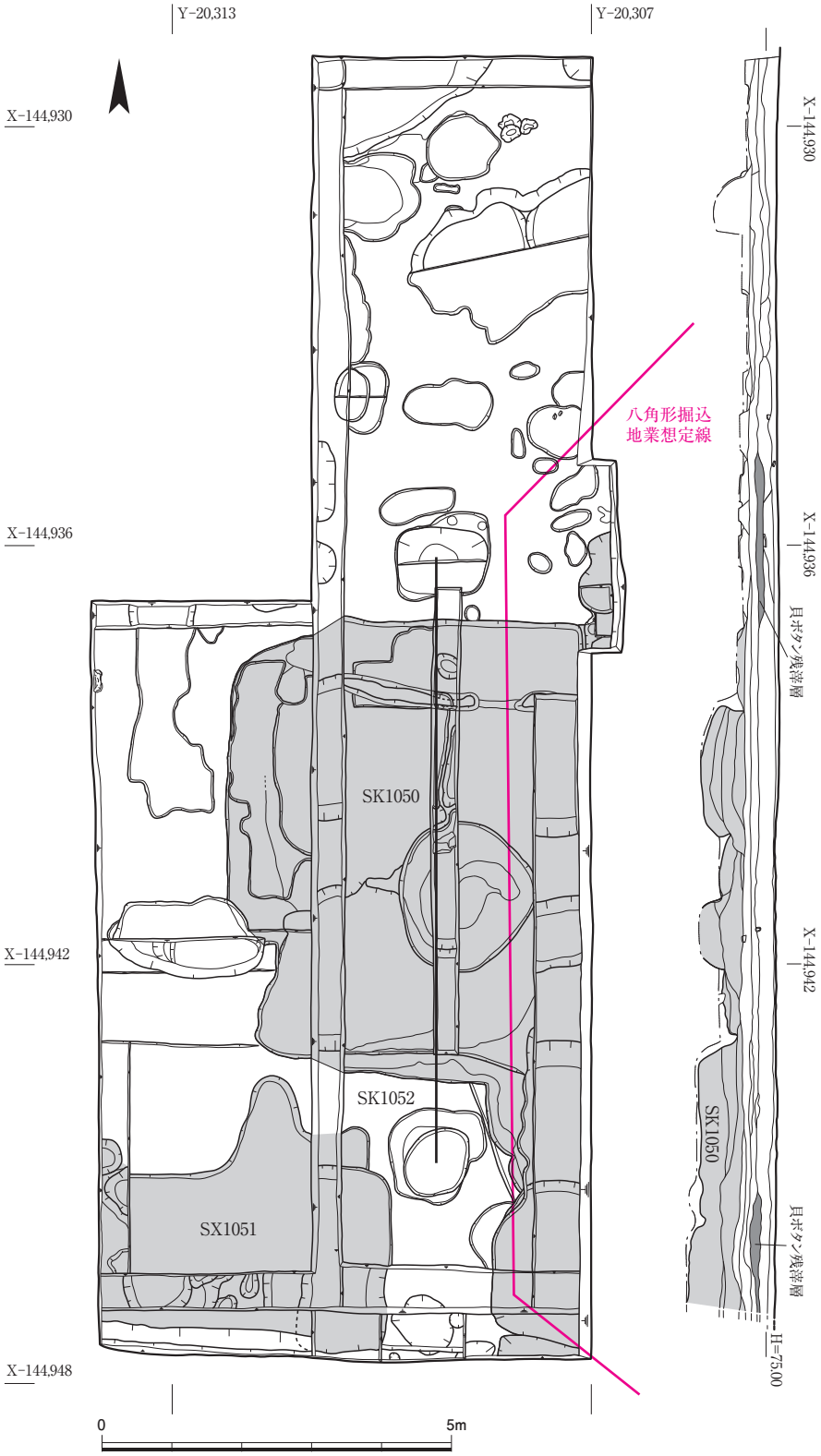

図228　第498次調査遺構図・東壁土層図　1：100

であろう。

②土取穴の可能性　複数の穴が重複し、なかには断面が袋状になるものがあることから、粘土採掘坑の可能性も考えられた。地山は精良な明黄色の粘質土で、同様の土が東塔の版築層にも使われていることから、版築土採取のための土取穴の可能性も考えられよう。しかし、広く浅く掘った部分を埋め戻し、団子状に深く掘り下げる工程は、粘土採掘坑と考えた場合に不自然な点も多い。

（神野）